猿新聞

編集責任者
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会

発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区:60部
つつじが丘:430部
【全戸配布】
国津地区：380部
市民センター：90部
（9地区）
名張市議会:20部
名張市役所:20部

農業形態と鳥獣害

日本の各地には、いろいろなタイプの自然がありますが、その中を野生鳥獣は互いにつながり合って、それぞれが餌場と認識する一定の行動域をもってその中で生活しています。

餌量は四季それぞれに変化しますが、餌が豊富にあれば、行動域は小さくて済み、反対に餌が少なければ、広い行動域が必要になります。したがって、ある集落で野生鳥獣の出没回数や頭数が増加するというのは、多くの野生鳥獣がその集落をよい餌場と認識して住み着けるほど多くの餌があることになります。

なぜ野生鳥獣の集落への出没が激化するのかなど、地域ぐるみで現状を正確に把握し目指す方向性を共有し、対策を講じるべきと考えます。短絡的に柵の設置や駆除で対応することは抜本的な解決につながりません。

獣害の要因は種々考えられますが、農業形態の変化が大きく影響しています。

農業形態の変化が鳥獣の生息環境にどのような影響を及ぼしているのでしょうか。

戦後の食料難の時代以降、野生鳥獣が激減し、野生鳥獣による農作物被害がほとんど問題とならなかった時代に、農業形態は大きく様変わりしました。

昔の農家は毎日のように畑にでて作業をしていました。これが結果的に人の存在を野生動物にアピールしていたのです。

現在では、効率的な機械化による短期決戦型農業で、田畑での無人時間が長くなっています。また、ブランド性の高い早生品種の普及で稲作形態も大きく変わり10月には収穫。収穫後は翌年春まで、田圃は無人状態。畑作物では季節にかかわりなく、多くの野菜が周年栽培されています。加えて、その野菜たるや果物と見紛（みまご）うほど糖度が高くなっています。年間を通じて甘い野菜高い野菜は人間だけでなく野生鳥獣も大好きです。

これら今日的な農業形態が、野生動物への配慮など必要のない時期に構築されたのです。

例えば、昭和年代では、稲刈りは11月中旬以降に行われ、畦畔の草刈りは地際まで鎌で行われていて、12月～1月に水田や畦畔で緑草が繁茂することはなかったのです。しかし、現在では、稲刈りは10月が中心で、草刈りは9月下旬です。稲刈り直後に耕耘された水田、稲刈り前に刈り払われた畦畔のいずれでも、厳冬期に緑草が繁茂し、野生鳥獣に対しての非意図的な餌づけになっています。

果樹や野菜産地での無造作に放棄されている、摘果クズや残さにも同じことがいえます。

更にいえば、コンバインによる収穫ロスも無視できない大きな餌づけとなっています。

昔の農家は、刈り取り後、落ちた稲穂を全て拾い集めていました。「落ち穂拾い」という言語はいまや死語？。

野生鳥獣への配慮を欠いた農業形態が獣害を誘引しているのです。

鳥獣害に対しさまざまな対策がとられてきたにも関わらず、現農業は昔とは比較にならない程の餌を生みだしているのです。このことが、集落で鳥獣害が増加する最大の原因だということを、認識する必要があります。

ハナレザル対策

日本におけるニホンザル（以下サルと表記）の分布域は、ここ25年間に、1.5倍に拡大（環境省）し、それに伴って各地でサルによる被害が深刻化しています。

加害によって栄養価の高い食物を採食することにより個体数増加につながり、被害地域が拡大するという悪循環が生じ（しょう）ています。

サルによる被害は、人馴れの進行に伴い人的被害や家屋侵入などが激化傾向にあります。

近頃、名張市ではハナレザルの市街地への出没が頻繁で、人身被害が発生するなど、ハナレザルの横行が目立ちます。

サルは山に棲むイメージが強いですが、ハナレザルはどんなところにでも出没します。

市街地には、庭の果樹や家庭菜園・生ゴミなどが多く、彼らにとって、決して棲みにくい環境ではありません。

サルは四肢が発達していて高い障害物であっても乗り越えることができることから、その対策は最も難しいといわれています。

ハナレザルの被害は一過性で自然消滅することが多いが、出没したサルの特性により被害が甚大で定着性が高い場合もありますが、いま名張市つつじが丘に出没するハナレザルは、地域に対する依存度が非常に高く住民を悩ませています。ハナレザルは神出鬼没で、どこにでも出没するのが特徴です。サルの出没に対して経験のない地域では、出没そのものに過敏に反応し、大騒動になりがちですが、冷静に対応するよう心がけて下さい。

一カ所に定着している群れ個体は檻で捕獲できることもありますが、広い範囲を動き回るハナレザルは、よほど運が良いか、餌のない季節でないと檻での捕獲は困難です。被害の少ない山間部に追い立てたとしても、追い立てをやめればすぐに戻ってくるでしょう。

発信器のついていない単独あるいは少数の集団を適格な方向へ追い立てること自体、困難な作業です。

捕獲も追い立ても困難だとすると、ハナレザルが来ないようにするしかありません。

危険を冒してまで、人目に触れる街にハナレザルがやってくるのは、彼らにとって何か利益があるからです。一度オイシイ思いをしたら少々の危険を冒してでも人間の生活圏に入り込んできます。

街ぐるみで、サルにとっての「利益」を排除することがハナレザル対策の第一歩です。

★大人になって群れを離れることは「ニホンザル」の習性で特異なことではありません。

里山の再生と『ナラ枯れ』

今まで行われてきた鳥獣害対策は局所的防御が主になっていて、持続可能な対策ではなかった面があります。

現在の手法では鳥獣害から作物を守るには、人手をかけるしかなく、人手の少ない山間地域で、どうやって人手をかけるかが問題です。

獣害熾烈化の原因は人間と野生動物の生活圏の境界線が接近してきていることにあると考えられます。野生動物と人間の共存・棲み分けを目的に、各々の生活圏の線引きをすることが重要なことになります。一昔前までは、人間はイノシシをはじめとする野生動物と上手に棲み分けをしていました。それは、森と農地・集落との間に見通しの良い里山が存在し、人間と動物の生活環境をわける緩衝帯としての役割を果たしていたからです。しかし現在ではその里山や人工林、竹林の維持管理がされていないため、結果として、野生動物が、集落に出現する事態となっているのです。

里山管理意欲の低下が、獣害を熾烈化させているといっても過言ではありません。

かつては里山だけでなく、さらに奥山にまで人間活動あって、野生動物にとっては、その気配が脅威で人里に降りてこられなかったのです。

近年は薪や炭がほとんど作られなくなるなど、二次林（雑木林）の経済的な価値がほとんどなくなっています。さらに、農山村では過疎化のために手入れが行われなくなり、里山の質の低下や消失が目立っています。日本国土の約4割を締める里山が、いま消滅の危機に瀕しているのです。

日本の里山は、動植物の衰退など生物多様性の劣化が進行しているいま、SATOYAMAと呼称され世界的に注目を浴びています。そこでいま、高齢化が進み山林の整備が進まず、山と里の境がなくなりつつある現在、山林の環境を整備し保全することで、生物多様性や、人と野生鳥獣が共存できる里山を復活させ緩衝地帯をとりもどし、野生鳥獣との棲み分けを目指す動きが日本各地で起こっています。

また、環境省の「新・生物多様性国家戦略」では、わが国の生物多様性の危機の一つに里地里山の危機を位置づけ、重点的に取り組むといっています。

だが、悪いことは重なるもので、里山は近年カシノナガキクイムシ（カシナガ）という害虫に犯されています。いわゆる「ナラ枯れ」です。近年、北海道を除き全国的にナラ類やシイ・カシ類の木が枯れるナラ枯れという被害が広がっています。

三重県では、森林が存在しない木曽岬町と川越町を除いて、すべての市町で被害が確認されています。

ナラ枯れは野生動物の餌となる実をつける広葉樹に発生します。

広葉樹を導入し森林の餌場価値を上げ、人と野生動物の棲み分けの取り組みを推進している矢先のナラ枯れは、獣害対策にとって大きな障害となります。

今後、地域の森林植生は、ナラ枯れにより大きく悪化することは疑う余地はなく、被害の拡大が懸念されています。ナラ枯れの病原菌である「カシノナガキクイムイシ」防除・駆除は難しいそうで、「松枯れ」同様、長期戦になりそうで心配されています。

アライグマのこと

アライグマは冬眠をするようです。気温がマイナス４度以下になると「巣ごもり」をします。これはクマなどの「冬眠」とは違い「半冬眠」状態で、活動は大きく低下します。マイナス４度上回ると活動は続きます。寒暖差が少なく暖かい地方では一年中活動すると思っておいて下さい。

近年、アライグマの農作物被害や生態系に及ぼす影響が問題になっています。農業被害は、ここ数年３億円超（農水省）と甚大ですが、被害額を急速に減少させることは難しいと考えられています。完全駆除以外に対策はないのではないでしょうか。

アライグマは、原産は北アメリカですが、いまは日本やヨーロッパに外来種として生息している動物です。

日本では、生態系への悪影響や感染症の恐れなどから、２００５年に特定外来生物に指定されています。

アライグマの天敵となる大型肉食動物は日本には存在せず、最大の天敵は人間だけです。天敵となる上位捕食者や競合する動物不在の現状では増殖一方ということになります。日本に生息するタヌキなど小動物にとっては、食物連鎖の位置づけから考えて、気性の荒いアライグマは上位捕食者となり在来の小動物などが駆逐されることなどで、生態系バランスが崩れ在来動物の絶滅が危惧されています。

日本での野生化・定着の由来は、手先が器用なので飼育場からの脱走。または、飼育者の遺棄が殆ど。１９６１年、犬山市日本モンキーパークでは12頭という大量逃亡事件が起きています。

アライグマは非常に気性が荒く、ペットが襲われることもあり、猟犬が襲われた事例もあります。

日本での生息数は？。殆どの都道府県でアライグマが確認されていて、全国の捕獲数は04年度の約３千匹から14年度は１０倍の約３万匹（環境省）を越えたともいわれています。このことから日本全体で相当数のアライグマが、生息して繁殖していることが伺えます。

アライグマは繁殖力が強く毎年春に３～６頭ぐらいの子を産む。加えて生存率も高く、野生下での寿命は、５年ほどといわれていますが、１３～１６年生存したという記録もあり幼獣の死亡率も低い。

アライグマは適応能力が高く、平地から山地、寒冷地域から温暖地域まで生息することが可能です。基本的に夜行性だが、昼でも活動することがあります。また、民家や神社の屋根裏などを棲家にすることもあります。地域や場所を選ばず生息できる適応能力の高さが増加を促しています。

感染症を保有している可能性がありますので、直接の接触を避け、糞尿で汚染された場所には、近づかないよう注意して下さい。

チョット一服

月桂冠とオリーブ冠

マラソン競技などの勝者には月桂冠が贈られ、その勝利が讃えられます。また、F1レースの優勝者も月桂冠を首に表彰台に登りシャンパンを掛けあい祝福します。

一般的に、オリンピックなどスポーツ大会の勝者は月桂冠を頭に飾ると思われていますが、これは間違いだそうです。スポーツの勝者に与えられるのは、本来は月桂冠ではなくオリーブで作った冠（かんむり）だそうです。

そもそも、古代ギリシャの英雄ヘラクレスがオリンピアの庭に植えたオリーブの枝を、オリンピックの勝者に与えたことが由来です。2004年のギリシャ・アテネオリンピックでは、優勝者には金メダルとともにオリーブ冠が与えられたそうです。 一方、月桂樹は文化芸術の神・アポロンの聖樹とされていて、その枝で作った月桂冠は詩人や文人受賞者の頭上を飾るものとなっています。

スポーツではオリーブ冠、文化では月桂冠というわけです。

最近はその間違いに気づいたスポーツ関係者も多いようで、2012年の大阪国際マラソンでは、それまで優勝者に授与していた月桂冠をオリーブ冠に変えたとのことです。

オリーブが平和のシンボルになったのも、都市国家どうしで戦争を繰り返していた古代ギリシャにおいて、オリンピック開催中だけは休戦にしたからだそうです。さて、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会では月桂樹、オリーブ冠どちらが使われるのかな？。

名張B群移動状況 平成30年4/21～平成30年5/20

編集局より

サルの遊動域は、その群れの個体数により決まります。個体数が多ければ遊動域は広くなります。遊動域内の餌量が問題なのです。

元B群は、30頭前後の群れで、広大な遊動域を持っていましたが、大量捕獲後、10頭余りと激減し遊動域も狭くなっていますが、大きく遊動しなくても個体全体の餌量は賄われているのです。

現B群は、広大な遊動域の一部のみ使って生活をしています。遊動域が狭いということは、その周辺の自然が比較的豊であるということがいえます。隣接するA群とは青蓮寺湖周辺で接近しているので、A群の侵入がないか心配です。

遊動域の利用の仕方も世代を越えて受け継がれ何年にもわたって同じ場所で生活を続けます。

今後、個体数の自然増加が推定される、B群の遊動域の変化に注目していきたいと思っています。

名張A群移動状況 平成30年4/21～平成30年5/20

編集局より

近頃、新たなサル問題として、市街地に侵入したハナレザルによる生活環境被害や人身被害が増加し、地域住民にとって大きな問題となっています。

名張市つつじが丘でも頻繁にハナレザルが出没し、人身被害も発生しています。ハナレザルの出没は一過性であることが多いが、つつじが丘のハナレザルは被害が甚大で定着性が高いです。サルは学習能力が高いので、人なれがすすむにつれ、悪行がエスカレートしていくのが特徴ですので、早期捕獲が望まれます。

また、市や警察、消防、教育委員会など連携した対策も必要です。

どうして市街地に現れるのか？

収穫しない果実や野菜など餌になるようなものはありませんか？

追い払いは行っていますか？

ハナレザルを誘引しているものはありませんか？

地域ぐるみで考えてみましょう！